

氏 名： 浅野 いずみ

学位の種類：博士（看護学）

学位記番号：甲第 74 号

学位授与年月日：令和 2 年 3 月 20 日

学位授与の要件：学位規則第 15 条第 1 項該当

論文題目： 発達障害児を育てるブラジル人の母親のトランジションを促進する
看護介入プログラムの開発

学位審査委員： 主査 柳澤理子

副査 服部淳子

副査 大原良子

副査 片岡純

副査 清水宣明

論文内容の要旨

I. 研究の背景

在留外国人の年齢層は20～30代が52.7%であり、子育て世代が多いことが特徴である。愛知県の在留外国人割合はブラジル国籍が多いことが特徴であり、在留ブラジル人も同様に子育て世代が多くみられる。

子どもに発達障害があるとわかった母親は、それまでの健常な児を育てる母親から発達障害児を育てる母親へと変化する必要がある。このような一つの状況から他の状況へと移行する経験を示した看護理論に、トランジション理論（Meleis, 1986）がある。

在留ブラジル人の発達障害児を育てる母親は、それまでの「健常な子どもを育てる」母親から、日本の中で保健医療福祉システムを活用しながら「発達障害児を育てる」母親へとトランジションする必要があり、このトランジションを健全に促進することが、その後の母子の健康増進に繋がると考えられる。しかし、ブラジル人の母親は支援に繋がりにくく、トランジションの促進要因が脆弱だと考えられる。

II. 研究目的

発達障害児を育てるブラジル人の母親が「健常な子どもを育てる」母親から、日本の中で保健医療福祉システムを活用しながら「発達障害児を育てる」母親へとトランジションするプロセスを明らかにし、トランジション促進のための看護介入プログラムを開発する。

Ⅲ. 研究方法

本研究は、トランジションプロセスを明らかにする研究1と、介入プログラムを開発する研究2から構成した。なお、本研究は愛知県立大学研究倫理審査委員会の承認を受けた。

研究1 発達障害児を育てるブラジル人の母親のトランジションプロセスに関する研究

1. 研究目的： 発達障害児を育てるブラジル人の母親が「健常な子どもを育てる」母親から、日本の保健医療福祉システムを活用しながら「発達障害児を育てる」母親に至るまでの心理的なトランジションプロセスを明らかにする。

2. 研究方法

1) 研究協力者 ブラジル生まれで日本に居住し、発達障害と診断されてから少なくとも1年以上当該児を育てている母親11名。

2) データ収集方法 必要時通訳を介し半構成的面接を実施した。

3) 分析方法 日本語に通訳された内容で逐語録を作成し、M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）による分析を行った。

3. 結果及び考察

研究協力者は30～44歳、子どもは男児9名、女児2名、年齢2～8歳、全員が自閉症であった。以下、概念を〈 〉、カテゴリーを《 》、コアカテゴリーを【 】で示す。

発達障害児をもつブラジル人の母親は、他者より指摘される前に1歳半前後から〈ぬぐえない違和感〉を抱き、〈子どもの個性だと思いたい〉という感情との間で《半信半疑の胸中》になり、〈母国語での情報収集に奔走〉していた。〈ぬぐえない違和感〉が日に日に大きくなり、健康診査等で保健医療職から「様子を見よう」と言われても「待つ」ことが苦痛で、〈一刻も早く白黒つけたくて待てない〉という思いが膨らみ、指示を振り切り受診していた。しかし、子どもの年齢や外国人で日本語の遅れか発達障害なのか判定しにくく、診断がついたのは2～3歳前後であった。

〈診断による安堵〉を感じ〈我が子を理解し接する〉という考えへと変化する母親がいる一方、日本語の不自由さや母国とは異なる医療者の対応により《混迷へのダイビング》に陥る母親もいた。

また、子どもを「健常」と捉える〈配偶者と共通理解できるまでの壁〉を感じたり、周囲の〈配慮のない言動からの傷〉を受けたり、〈障害を疑う気持ちを理解してもらえない苦悩〉や〈我が子の障害を話せない辛さ〉を抱えており、根底には《子どもに障害があることで引きずる痛み》がみられた。このため、以前から付き合いのある健常児のママ友とは距離をおき、同じ障害児のママと付き合い始めるなど、〈取捨選択する交友関係〉へと移行していった。

〈心の支えとなる人との邂逅〉を通じて日本の保健医療福祉サービスとつながり、《強くしてくれる後押し》を得、たとえ〈配慮のない言動からの傷〉を受けても、〈雑音には馬耳東風〉と受け流す術を身につけていき、〈我が子の僅かな成長・変化も嬉しい〉と感じ、小さいことにとらわれずただただ子どもの幸せを望み、子どものためならなんでもする母親、すなわち【子どものためのスーパーウーマン】へと変化していった。

研究参加者は、診断後一時的に母国に帰国しても、全員、将来も日本に留まり〈日本で我が子なりの

自立を望む>と考えており、現在利用できるサービスだけでなく、学校や自立生活に向けて活用できる情報を探するなど、子どもの将来にも目を向けることができる母親へと変化していった。

研究2-1 発達障害児を育てるブラジル人の母親のトランジションを促進する看護介入プログラムの開発

1. 研究目的 日本の保健医療福祉システムを活用しながら「発達障害児を育てる母親」へのトランジションを促進する看護介入プログラムを開発し、内容妥当性を検討する。

2. 研究方法

1) 研究対象者

児童発達支援管理責任者、相談支援専門員、ブラジル人発達障害児に関わる保健師、日本で子育て経験があるブラジル人女性の4名で専門家パネルを構成した。

2) 介入プログラム開発、データ収集および分析方法

研究1の結果とトランジション理論を基盤とし、看護介入プログラム原案を作成した。専門家に事前に原案を渡し、内容の妥当性、期待される効果、実施可能性等の意見を記入してもらい、会議を開催し、助言に基づき介入プログラムを修正した。

3. 結果及び考察

1) トランジションプロセスの妥当性

専門家より、ブラジル人の母親と日本人の母親のトランジションプロセスは類似する点が多く、本プロセスは納得できるとの見解を得た。

2) 看護介入プログラムの修正

修正点は、①講義よりもグループ討議を多くする、②各回終了時に希望者に相談対応を行う、③講師を有資格者とする、④日本の保健医療福祉システムに関する情報への焦点移動の4点であった。以上の点を修正し、全5回の介入プログラムを作成した。

研究2-2 開発したプログラムの実施可能性および効果の検証

1. 研究目的 開発した看護介入プログラムを実施し、プログラムの実施可能性および効果を検証する。

2. 研究方法

1) 研究対象者 発達障害児もしくはその疑いがある児をもつブラジル人の母親11名。

2) データ収集方法

実施可能性： 実施上の困難や不都合、良かった点、改善点について、研究者の観察、プログラム終了時の母親へのグループインタビューにより情報を収集した。

プログラム効果： トランジションステージの変化と母親の育児ストレスの変化を実施前後に測定した。トランジションステージ変化は、研究1のトランジションプロセスのカテゴリーに該当する質問とトランジション理論における「反応パターン」の進捗指標から独自に24項目を作成した。

育児ストレス： 育児ストレス尺度短縮版（PSI-SF）を用いた。PSI-SFは、親自身のストレス、親

子関係の機能不全、子どもの特徴に関するストレスの3つの下位因子から構成され36項目からなる。

3) 分析方法

グループインタビューは質的記述的分析を行った。トランジションステージの変化およびPSI-SFは、総得点および下位因子得点について介入前後でWilcoxonの符号付順位検定を行った。トランジションステージの変化については、総得点変化が0-1点を変化なし、2-4点を中程度の変化、5点以上を大きな変化と判断し、個人の変化を検討した。

3. 結果および考察

1) 研究参加者

母親は30~44歳、子どもは2歳6か月~7歳2か月で、男児7名、女児4名であった。1名がプログラム参加時点で診断未確定だったが、他は自閉症であった。診断からプログラム参加までの期間は、1年11か月~4年4か月であった。1名は1回のみ参加であったため分析対象者より除外した。

2) プログラムの実施可能性

母親のプログラム受入れは良く、準拠集団としてのグループ形成も良好であった。肯定的意見が多かったが、教室の実施間隔、配布資料、夫の参加について改善意見が出された。

3) プログラムの効果

(1) 母親のトランジションステージの変化

プログラム実施前の総得点は平均±標準偏差84.0±7.288、終了後は87.5±6.311で、有意な上昇を認めた($p<0.05$)。各項目で有意差があったのは「暗闇のなか進まなければいけない不安がある」の一項目であった($p<0.05$)。個人の変化では、出席回数と総得点には特定の傾向はなかった。診断からプログラム参加までの期間では、3年以上群(2名)及び2年以上3年未満群(3名)では、変化はないか中程度であった。一方、2年未満群(5名)では、変化は中程度または大きな変化であった。本プログラムは、診断前後もしくは診断後短期間の対象に対し効果が高いと思われた。

(2) グループインタビューによる評価

トランジションが進んだと考えられる内容として4カテゴリーが、トランジションが進んだと判断できないがプログラムに肯定的である内容として5カテゴリーが抽出された。

(3) 母親の育児ストレス(PSI-SF)の変化

プログラムの実施前後で総得点および下位因子のいずれも有意差はなかった。個人の変化をみると、ストレスが増加した者と減少した者がおり、外的条件による個人差が結果を相殺した可能性がある

IV. 結論

発達障害児を育てるブラジル人の母親のトランジションプロセスは概ね日本人の母親と類似するが、障害を疑ってから待つことができず、診断をはっきりさせようと行動を起こしプロセス進行が早いという特徴が明らかになった。また、開発したプログラムのトランジション促進効果は、特に《混迷へのダイビング》前後にいる診断前後もしくは診断後短期間の母親に有効であることが示唆された。

論文審査結果の要旨

【論文審査及び最終試験の経過】

愛知県立大学大学院看護学研究科学位審査規程第 13 条および看護学研究科博士後期課程の学位に関する内規第 14 条、第 16 条に基づき、令和 2 年 1 月 28 日、第 1 回学位審査委員会を開催した。本論文については、上記内規第 16 条の条件を満たしていることを確認した。質的研究の分析結果と研究テーマとの関連、図表の表記方法、結果について説明が不足している点、文章の誤記等に対し一部修正の指摘があり、修正を行ったうえで最終試験に臨むこととした。

また、副論文として次の 2 編を認めた。

- 1) 浅野いずみ(2013). インドネシア共和国 A 県 B 保健所における地域看護師の家庭訪問についての認識. 愛知医科大学看護学部紀要, 第 12 巻, 19-28.
- 2) 浅野いずみ, 蓑田さゆり(2018). 看護学生がインドネシア人看護師候補者との交流活動によってうける影響. 日本国際保健医療学会雑誌, 第 33 巻, 第 2 号, 69-78.

令和 2 年 2 月 12 日、愛知県立大学大学院看護学研究科博士後期課程の学位に関する内規 17 条に基づき、50 分間の公開最終試験を実施した。同日、第 2 回学位審査委員会を開催し、博士論文および最終試験の結果を総合的に審査した。

【論文審査及び最終試験の結果】

本論文は、発達障害児を育てるブラジル人の母親が「健常な子どもを育てる」母親から日本の保健医療福祉システムを活用しながら「発達障害児を育てる」母親へとトランジションするプロセスを明らかにし、トランジション促進のための看護介入プログラムを開発することを目的とした研究である。

在留外国人は、20~30 代が半数以上を占め子育て世代が多い。このため、一定の発達障害児が含まれるが、在留外国人の増加とともに発達障害児を育てる母親も増加している。愛知県はブラジル国籍が多いため、本研究でもブラジル人に焦点をあてている。

我が子に発達障害があることを受け入れ、その子に応じた子育てができるようになる過程を「移行(トランジション)」と捉え、トランジション理論 (Meleis, 1986) を基盤理論として用いており、一貫性をもった研究デザインとなっている。

本研究は、発達障害児を育てる母親へのトランジションプロセスを明らかにする研究 1 と、母親への介入プログラムを開発する研究 2 から構成されている。

研究 1 では、ブラジル生まれで日本に居住し、発達障害と診断されてから少なくとも 1 年以上当該児を育てている母親 11 名を研究参加者とし、必要時通訳を介しての半構成的面接を実施し、M-GTA (修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ) による分析を行った。研究に際し、M-GTA に関する研究会で分析方法について理解を深め、同研究会で分析過程を発表し専門家からの吟味を受けるなど、分析の適切性に留意しながら研究を進めた。

【子どものためのスーパーウーマン】というコアカテゴリーのほか、《半信半疑の胸中》《混迷へのダイビング》《子どもに障害があることで引きずる痛み》《強くしてくれる後押し》など、介入のポイント

となるカテゴリーや概念を抽出し、専門家やブラジル人の母親からも納得できるとするストーリーラインを導くことができた。「健全な子どもを育てる母親」から「発達障害児を育てる母親」へのトランジションプロセスは、日本人の母親との共通点も多く、育った社会や文化が異なっても、トランジションプロセスには共通性があることが示唆されたほか、<母国語での情報収集に奔走>や<一刻も早く白黒つけたくて待てない>など、保健医療職からの「様子を見よう」という指示に対して「待つ」ことが苦痛で、本国の保健医療情報の探索も含めて積極的に行動を起こす、その一方で、ブラジルへの帰国は考えておらず、将来も日本で子育てを続け、日本の保健医療システムを活用しながら日本でこの子なりの自立を望む>という、ブラジル人特有の心理も明らかになった。経済的理由やブラジルの発達障害児に対する保健医療サービスの在り方が、これらの違いの背景にあると考察している。

研究2では、発達障害児を育てるブラジル人の母親のトランジションを促進する看護介入プログラムを開発した。研究1で見出したトランジションプロセスとトランジション理論を基盤として、介入プログラムを考案し、児童発達支援管理責任者、相談支援専門員、ブラジル人発達障害児に関わる保健師、日本で子育て経験があるブラジル人女性で専門家パネルを構成、プログラムの妥当性を検討している。サービス提供者だけでなく、サービス利用者であるブラジル人の母親を加えたことで、専門性だけでなく利用者の視点に立ったプログラムの構築が可能になった。

開発したプログラムの実施可能性とトランジション促進に対する効果を検証するため、発達障害児をもつブラジル人の母親11名を対象にプログラムを実施し、このうち1回のみの参加であった1名を除き、10名を分析対象とした。

実施可能性は、研究者の観察とプログラム終了時の母親へのインタビューから、プログラムの効果は、トランジション理論における「反応パターン」の進捗指標を基にした質問項目と、育児ストレス尺度短縮版（PSI-SF）、グループインタビューを用いて検討した。

実施可能性については、いくつかの改善点は見出されたものの、母親のプログラム受入れは良く、準拠集団としてのグループ形成も良好で、全体として肯定的評価であったことから、本プログラムの実施可能性が確認された。

プログラムの効果については、トランジションステージ全体および「暗闇のなか進まなければいけない不安がある」の項目で進捗がみられた。また、参加者の属性との検討の中から、本プログラムは、児の年齢よりも診断からの期間に影響を受け、特に診断後短期間の対象に対し効果が高い可能性が示唆され、質的な評価でも肯定的な結果を得ている。一方、ストレスに対する効果は個人差が大きく、外的要因の影響が強かったと思われ、今後の課題として残された。

最終試験では、本研究が特定の集団を対象として開発されたことによる汎用性への課題、児の性別等の属性と母親のトランジションステージ進行との関連、ブラジル人以外の外国人への応用の可能性等について質問がなされ、本研究で解明されたこと、解明されていないことを踏まえて、適切に回答されていた。

大学院博士後期課程で得られた学びについては、研究に理論を活用することの重要性と効果、質的研究・量的研究双方で理解が深まったこと、論理的に思考を積み上げて研究を進めることの大切さなどが語られた。また、これに満足せず、理論を研究と結びつけること、量的研究手法などについて研鑽を積

んでいきたいと、今後の抱負が語られた。

以上の結果を総合的に検討した結果、本学位審査委員会は、本論文が愛知県立大学大学院看護学研究科博士後期課程の学位に関する内規第 16 条 2 項の審査基準を満たしており、看護学領域の博士論文として、研究・教育・実践の発展に寄与する学術的価値のある論文であり、論文提出者の浅野氏が看護専門領域における十分な学識と、研究者としての能力を有することを確認し、博士（看護学）の学位を授与するに値するものと、全員一致で判断した。